

〈書評〉

ハン トンヒョン
韓 東賢 著

エスノグラフィー
『チマ・チョゴリ制服の民族誌』
——その誕生と朝鮮学校の女性たち』

(双風舎 2006年 242頁 ISBN4-902465-08-6 2,200円+税)

徐 阿貴



在日朝鮮人の後続世代が通う民族学校では、中学と高校レベルの女子生徒は、朝鮮の民族衣装であるチマ・チョゴリを制服としてきた。民族差別がはびこる日本社会において、まさに「一目で」民族的出自を表すチマ・チョゴリが制服とされていることに、「いったいなぜ？」と疑問をもった人は少なくないだろう。本書は、民族学校のチマ・チョゴリ制服に関する初の本格的な研究である。チマ・チョゴリは、女子生徒や女性教師らの自発的な着用から制服化されたといわれる。著者はこの通説をもとに、北朝鮮が在日朝鮮人社会への関与を深めた1960年前後に、チマ・チョゴリが民族学校の制服として導入されたプロセスを、歴史的資料と当事者へのインタビューによって明らかにしようとする。

チマ・チョゴリ制服のユニーク性は、以下の点から明らかである。まずチマ・チョゴリ制服導入以前、民族学校では、ブレザーやセラー服が女子生徒の制服であった。同じく民族学校に通う男子生徒については、パジ・チョゴリなどの朝鮮に由来する衣服ではなく、学ランやブレザーなどが制服として採用されている。また、そのデザイン的なルーツは朝鮮半島にあるが、植民地解放後の韓国や北朝鮮の学校制度において、チマ・チョゴリが制服として取り入れられたことはないという。

在日朝鮮人を日本人の下位に位置づけようとする日本社会において、チマ・チョゴリ制服は、抵抗的なアイデンティティを表し、とくに総連系社会では「民族の誇り」の象徴とされてきた。さまざまな意味が付与されたチマ・チョゴリ制服は、在日朝鮮人という、ディアスポラに生きる者たちのナショナリズム、エスニシティの議論において不可視化されてきた女性の存在や、ジェンダー秩序を示す例として検討される必要がおおいにある。

本書の構成は、以下のとおりである。第1章では、移民・越境者のエスニシティ、ナショナリズム、そしてジェンダーに関する社会学理論を参照しつつ、これらが重層的に交差する地点に、チマ・チョゴリの制服化という現象を捉える視点が示される。第2章では、着衣という行為を通じたアイデンティティ表現という視角からチマ・チョゴリ制服のデザインや構造について歴史的に検証し、植民地期朝鮮において従来のチマ・チョゴリをより活動しやすい形にした「改良チマ・チョゴリ」——近代教育を受け、既存のジェンダー秩序に抵抗する「新女性」も愛用したという——に、その原型を見出している。第3章および第4章では、チマ・チョゴリを学校生活で着るようになった当時の女子学生や、着用を広めた女性教師へのインタビューの分析である。ここでは、1950年代後半からの北朝鮮の接近、さらに帰国運動を通じて触発された在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティが、「着衣」によって表現されたのが

チマ・チョゴリ制服であったという見解が示されている。

本書の主張の柱は、2世の女子生徒や教師たちがチマ・チョゴリを自発的に着用しはじめたということ、つまり、女性たちの自律的な主体性（エージェンシー）の発掘にある。チマ・チョゴリ制服が学校組織による「お仕着せ」ではなく、若い世代の女性たちのイニシアティブにより着用が広まり、学校が追認したものであったことが、当事者たちへの丹念なインタビューを通じて明らかにされる。著者は、チマ・チョゴリ制服の生成が、1960年代前後の北朝鮮による「海外公民」路線の定着、さらに帰国事業を中心とした、祖国志向のナショナリズムの高まりと見事に呼応していることを、当事者の語りからあぶりだしている。たとえば、新潟港での帰国船歓迎式典で、民族学校的女子生徒が祝賀あいさつをした際、チマ・チョゴリを着ていたことが北朝鮮政府関係者の間で好意的に評価され、チマ・チョゴリの制服化につながったという。また、日本の高校を卒業後就職差別にあい、総連組織での仕事を経て設立間もない朝鮮大学校に入学した若い2世女性は、「取り戻された民族性」をチマ・チョゴリを着ることで表現しようとした。これらの現象は、「伝統の創造」や「エスニック・リバイバル」といった、近代化のプロセスに見るエスニック・アイデンティティの構築的な性格を見事に表わしている。第3章および第4章のインタビュー分析では、当時の在日朝鮮人社会に満ちていた「祖国」に対する熱狂的な空気が、女性たちの声を通じ、時間と空間を超えて読者に生き生きと伝わってくる。

当時の状況を鮮やかに再現する女性たちの語りは、この研究をなによりも魅力的にしている。それは、著者自身が1980年代に民族学校に学んだ2世であり、チマ・チョゴリ制服を着ていた体験によって可能になったとあってよいだろう。制服のデザインや構造の歴史の変遷、さらに、流行の着こなし方や着心地などの分析は、民族学校に通う女子生徒の日常生活や、身体感覚に肉薄したりアリティを提示する。たとえば、「毎晩、チマ（筆者註：スカートにあたる部分）を寝押しして、ピシッとしたプリーツを保つのに命かけて」いたこと。映画「若大将」シリーズを見に行くときは目立たないようにブレザーに着替えていたこと。自治体から支給されたセーラー服はアイロンをかけてもしわがとれず、「いやだ」と思い、お正月につくったチマ・チョゴリを着て学校に行くようになったこと。チマ・チョゴリ制服をめぐるこうした語りには、総連組織を中心とした民族社会の象徴というより、むしろそこに身をおいている若い女性たち個人の、着る主体としての側面が感じられる。

これまで述べてきたように、著者は、チマ・チョゴリが自発的に着用されるようになったプロセスを語りや歴史資料によってたどることで、在日朝鮮人女性の自律的な主体のあり方を示そうとしている。それは、在日朝鮮人女性をめぐるこれまで作り出されてきた、受動的なイメージを覆す企てといえよう。受動的なイメージとは、朝鮮舞踊部¹¹などと並んでチマ・チョゴリ制服が、「民族としての誇り」として象徴化され、さらに「見られる」、「保護されるべき」客体としての女性イメージを形づくってきたことを指している。

こうした受身のイメージを強めたのが1980年代末ごろからくり返されてきている「チマ・チョゴリ事件」である。北朝鮮と日本の関係が悪化するたびに、制服を切り裂かれたり、暴言や身体的暴力を受けるなど、民族学校的女子生徒たちが暴力にさらされてきた。事件を発端として、チマ・チョゴリ制服を着ている女子生徒が標的になっていることから、制服の見直し論議が民族学校を取り巻く人々の間でわきあがった。その議論の流れで、女子生徒だけが民族衣装のような制服を「着せられ」、「民族の伝統文化」を負わされていることが批判された。そして、民族社会における家父長制、たとえば良妻賢母型の

女性像の押しつけや、男女を区別する傾向、民族的ノスタルジーを女性にのみ投影する、などへの批判とともに、チマ・チョゴリ制服が女性差別という文脈から語られるようになった。

著者は、チマ・チョゴリ制服に対する女性差別という文脈からの批判に違和感を持ったことがきっかけで、女子生徒の自発的な着用の広がりによって制服化されたとする総連組織の「通説」を検証しようと決心したと述べている (pp.11-12)。女性たちは、朝鮮と日本、そして在日朝鮮人社会というそれぞれの社会の中心部分から、ジェンダー秩序によって周縁化されてきたことは否めない。しかし、チマ・チョゴリをみずから選び取った女性個人たちの行為には、女性たちがたんに抑圧されているだけの存在ではなく、日本、北朝鮮、そして在日朝鮮人社会と「交渉」する自律的な主体であることが表われている。そこには、みずから考え、決断し、行動しようとする女性の能動的なイメージが鮮明であり、従来の受身で、従属的なイメージとは異なる女性主体が表れている。

しかしながら、発端は女性たちの自発的な着用であったにせよ、チマ・チョゴリの民族学校における制度化を促したもっとも大きな要因は、祖国国家による「承認」にあったことに対してもう少し注意を払うべきであったと思われる。たとえば、民族学校を代表して帰国船の祝賀あいさつを読んだ女子生徒がチマ・チョゴリ姿であったことが、祖国政府の関係者から肯定的な評価を受け、これに総連の男性幹部教員らが反応し、制服化を決定したという (pp.112-113)。また、女子生徒たちが当初選んだチマ・チョゴリの色は黒であったが、祖国政府関係者が異を唱え、「祖国」の感覚にあうよう一旦紺に変更され、また黒に戻されたという (p.179)。祖国政府関係者は、チマ・チョゴリ制服の導入を直接指示したわけではない。とはいえ、チマ・チョゴリの制服化は、祖国国家の意向を意識し、これを反映したものであったことは否定できないだろう^{#2}。

ここで強調したいのは、チマ・チョゴリ制服誕生のドラマにみる能動的な女性主体は、いかなる条件のもとに成立が可能になったのかということである。在日朝鮮人男性に従属しないという意味での女性たちのより自由で自律的な主体性とは、海外公民路線や帰国運動などにより在日朝鮮人に接近していた北朝鮮国家に対応するものだった。女性たちの自律的な主体は所与のものではなく、男性中心的な組織を介さずに、女性たちが祖国からの呼びかけに直接こたえようとした中で形成されたともいえよう。本書は女性たちの自発性を強調するあまり、北朝鮮国家との関係を相対化する視点が弱いように見える。もちろん筆者は、チマ・チョゴリ制服誕生のプロセスに女性たちの自律的な主体性を見出そうとする著者の意図を、なんら否定するつもりはない。

最後に、本書は、チマ・チョゴリ制服を封建的な家父長制に還元することに対して、女性を受動的な存在にできてしまっていないかという違和感を出発点としている。かといって著者は、女性が抑圧されざるをえない民族社会の構造的な問題を見逃しているわけではない。チマ・チョゴリ制服の歴史的な生成プロセスを丹念に掘り起こすこの研究は、女性解放やジェンダー秩序の問題を直接論じていないが、在日朝鮮人女性の自律的な活動を浮き彫りにすることで、あたらしい女性主体の形成に貢献するものであるといえよう。

(そ・あき／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究員)

注

- 1 民族学校における朝鮮舞踊部は、運動会や学芸会や対外的なイベントなどで踊りを披露することが多く、花形的な存在である。筆者は、実際にある民族学校の校長が、舞踊部について「民族学校の花」と表現したのを聞いたことがある。
- 2 Enloe (1989) は、民族ナショナリズムの運動が持つフェミニズムからみた場合の両義性、すなわち、男性中心的な運動の中で女性が従属的な位置に置かれるだけでなく、女性が運動参加を通じて家庭の外部で活動するという「自由」を得ることを可能にするを指摘している (Enloe 1989, pp.54-64)。

参考文献

Enloe, Cynthia. *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1989.